法然房源空の中国浄土教観

小川貫弌

一

浄土教の歴史の上で、その伝統意識がつよく現れてくるのは、中国・日本を通じて十二世紀末から十三世紀にかけてである。中国では、南宋の石芝宗曉が『楽邦文類』五巻を編み慶元庚申（一二〇〇）に汪大猷、柏庭善月の序跋をつけて出版した。その巻三には、蓮社始祖慧遠法師伝と蓮社継祖五大法師伝をおさめて、中国浄土教を蓮社とよび、はじめて白蓮社の念仏をひらいた東晉の廬山慧遠法師をその始祖とした。慧遠の帰寂より今、大宋の慶元五年（一一九九）己未まで、およそ八百九年、その間この道をつぐ者として、一善導・二法照・三少康・四省常・五宗賾の五師の伝記をかかげて中国浄土教の伝灯を詳かにした。

その後、四明志磐は『仏祖統紀』五十四巻を撰述して天台宗を中心とした紀伝体仏教通史を大成した。その中の「浄土立教志」三巻に蓮社七祖と往生人の伝記を集大成している。そこでは始祖廬山慧遠・二祖長安善導・三祖南岳承遠・四祖長安法照・五祖新定少康・六祖永明延寿・七祖昭慶省常をあげ、先の宗曉の説をうけながら、これに多少の取捨を加えている。この『仏祖統紀』は、南宋の咸淳七年（辛未一二七一）出版をみている。近代楊仁山の『十宗略説』などによれば、南宋志磐の蓮宗七祖説を踏襲して、これに八祖（宋）長蘆宗賾・九祖（明）蓮池雲栖・十祖（清）梵天省庵の三師を加えて蓮宗十祖を立てている。

中国の浄土教は、六朝におこり唐宋の時代に著しい発展をとげ、明清の近世にまでその流行をみるが、日本における浄土教の展開とは全くちがった特異性をもっている。蓮社十祖にあげられる諸師の事蹟からみても、浄土教の信仰にのみ終始一貫した人は少ない。中国の仏教は隋唐諸宗派の成立をその特色とするが、このとき浄土教、乃至、浄土宗の成立を認めることは困難である。諸宗の学匠が浄土の経典を研鑽して章疏を著し、すすんで浄土信仰をなした人々は多く、兼学兼

修の傾向がつよい。中国で浄土教の信仰をひろめるのに、道俗が法社を結んで民衆の教化活動の念仏に重点をおくところから蓮宗とよんでいる。一方、浄土信仰が諸宗派の実践行儀となり、禅・教・律の三宗に融合する風格をもつて近世によんでいる。これらの性格が明確になるとき、その伝統意識が強調されてくる。それは南宋時代のことであつた。

二

南宋の宗曉が浄土教の伝灯意識にもえて、蓮社始祖・蓮社継祖五師伝を執筆するとき、わが国では法然房源空が『選択本願念仏集』二巻を撰述して浄土一宗の伝統を明かにしている。

月輪殿九条兼実は、かねてから吉水の法然房源空に帰依して、その教団の支持者であつた。その著『玉葉』によると、文治五年（一一八九）八月一日法然房の上人を請じて法文の語および往生の業を談じて、上人から受戒し念仏をはじめている。これから建久年間（一一九〇―九八）、しばしば法然上人を請じて受戒と念仏をつゞけ、建仁二年（一二〇二）正月二十七日には、上人を戒師として兼実自ら出家（法名円照）している。『選択本願念仏集』は、その直前、九条兼実の要請にこたえて法然房源空が撰述したものである。

このことは巻末の結びの文に、「しかるに、図らずも仰せをこうむり、辞謝するに地なく、よつて念仏の要文を集め、念仏の要義を述ぶ。ただ命旨をかえりみて不敏をかえりみず、これ即ち無慚無愧の甚しきなり。こいねがわくば、一たび高覧をへて後は、壁底に埋めて窓前にのこすことなかれ。恐くは破法の人をして悪道に墜としめざらんがためなり」と述べている。本書の撰述については、仮名本と真名本、その前後の問題や広本略本などの異本、選述の年月について、諸家が伝承する諸説はまちまちである。

元禄九年（一六九六）丙子正月、鎮西義山の校刊した『選択集』の奥書に、四種の異本をのべ、第一の稿本は始章に三経の説時を論ずるもの。第二の刪本は月輪殿下に呈して聖光に授けたもの。第三の正本は門人が末後に修飾して刊行し平基親の序文を収めるもの。第四の広本は門人がその本文を増証したものである。初後の稿本と広本は世に行なわれず、伝世刊行のものは刪本と正本のみと述べている。

京都盧山寺に伝わる鎌倉時代の粘葉本『選択集』一帖は、一頁七行の本文を主としてこれが一七三頁、八行本文のところ一九頁、六行本文のところ七頁、其他一頁、（欠紙四枚八頁）である。このほか細字で書くところに、十行のところ一頁、四行のところ一頁、三行のところ一頁がある。これらは本文に墨で○印をつけて、裏にありなどと註記してあるから、元来、紙背を利用して増補した文章である。本書には文中の字

句の抹消や訂正・増補を加えたあとが多く、他の流布本には見られない本願成就の問答（第三章私釈）や三経説時の問答（第十二章私釈）の六八七字の文章をもつことから義山の所謂稿本に該当するものである。

選択集の製作について、善慧房証空（一一七七―一二四七）が嘉禎元年（一二三五）に書いた『選択集密要決』巻一に「（法然）上人六十六の春、建久九年（一一九八）三月、この文を選せらるる時、人を簡ぶに座にあらず、真観（房感西）ありて法門を談じ、（善慧房）証空ありて経釈の要文をひき、安楽（房遵西）ありて筆をとりてこれを書く」と述べて、本書成立の事情を伝えている。この記録から廬山寺本をみると、終始安楽房遵西ただ一人の筆蹟ではなく、少くとも四人の執筆によつて成立している。建長七年（一二五五）の序文をもつ良忠（一一九九―一二八七）の『選択伝弘決疑鈔』の巻五には、選択集には広略二本のあることをあげ、「略はすなわち高覧の本、広本は執筆人が初心者のために後に名目を加う。自ら少異あるも高覧本にしかず」と述べている。その巻三には「この集の中にかくの如き（顧齬）等の文章のあるのは、恐くこれ執筆者の誤りのみ」として、次の伝聞を記載している。

「（法然）上人は月輪殿の命によつてこの集を選せらるゝ時、真観房（感西）をもつて執筆の任となす。筆に堪えざる故にしきりに固辞す。上人の云う、請いねがうところは、ひとえにその要道をしるさんがため、華筆を試みんと欲せず、ただわが言うところを記せと云々。綴文に不正のあるのはこれによるのみ」と述べているが執筆者を明示していない。ところがこれをうけた聖冏（一三四一―一四二〇）の『決疑鈔直牒』巻七には、この「選択集は多くの執筆あり。選択本願（念仏集の内題の字）より（六字名号と往生之業）念仏為先の註に至るは（法然）上人の御自筆なり。第一篇より第三本願章の能令瓦礫変成金の文にいたるは、安楽房（遵西）の執筆なり。問曰一切菩薩雖立其願より十二付嘱章に至るは、真観房（感西）の執筆なり。第十三章より第十六章の私云如経法応知までは、他筆なり。名字を失う。静以善導以下は、また真観房（感西）の執筆なりと云々」と草稿本の執筆者について或人の相伝としてかなり具体的に記録している。

善慧房証空は、加賀権守源親季の子で、建久元年（一一九〇）四月十四才のとき、元服を肯んぜず、自ら請うて源空の門に入り、得度して浄土教を学んだ。その性格は俊逸にして一たび見聞すれば通達せざるはなしという法然門下の逸才で、源空上人往生まで二十三年間師事した常随昵近の弟子であつた。建久九年選択集を撰集のとき、選ばれて勘文の役をつとめたのである。師の滅後十三年をすぎた嘉禎元年（一二三五）のころ『選撰集密要決』を書いたとき、選択集製作のおり、真

観が法門を談じ、証空は経釈の要文を引き、安楽が執筆したことを述べて、先師の宗義を詳にせんとしたのである。

真観房感西については、その年時を詳かにせないが、十九才のときはじめて法然上人の門室に入り、師事して法要の咨詢も多年であつたから選択集の製作のとき、この人を執筆者とせられたのである。法然門下では進士入道とよばれた人である。良忠が『決疑鈔』のなかで真観房が選択集の執筆の任にあてられたとき、これを固辞した一面を伝えるのみであるが、結局、安楽房遵西が執筆することゝなつた。その間の内部事情は知る由もない。

三

聖冏の『選択伝弘決疑鈔直牒』巻七に、草本には多くの執筆がありとその相伝の説をあげている。これを京都盧山寺に伝来した草本を参照対比するに、なんら背反するところもなく、他に伝承する所説とも、矛盾が認められない。今日、盧山寺に襲蔵する選択集草本は、少くとも次の四名の執筆者によつて成立している。

一、内題の名と六字名号およびその註記の文字は、法然上人源空の親筆である。

二、第一章から第三章の途中までが、安楽房遵西の執筆である。

三、そのあと第十二付属章までが、真観房感西の筆蹟である。

四、その後、十六章の終まで、異筆であるが、執筆者の名が不明である。然し私は善慧房証空の筆蹟でないかと思う。

五、最後の結語跋文にあたるところがまた真観房感西の筆蹟である。

はじめ選択集を製作するにあたり、真観房感西が命ぜられたとき、これを固辞したので安楽房遵西がかわつて執筆するに至つた。それにしても安楽房が途中で、真観房や失名者に交替したことについて何か内部事情があるようである。

これについて、実導（一三〇九―一三八八）の『西山上人縁起』に、次のような事件があつたことを伝えている。後法性寺禅定殿下（九条兼実）が法然上人にご帰依のあまり、浄土の要文をしるしてほしいと仰せがあつた。善慧上人も師法然上人のもとで、あい共に文をひき義を談じ『選択集』一巻をえらんで殿下に進ぜられた。その第二段まで安楽房が筆受してきたあるとき、「我もし翰墨に堪えざらましかば、いかでかこの仏法棟梁の座下にくわわりて執筆の役をつとむべき」と申した。このことを聞かれた法然上人は、「この法師、憍慢の言葉を出だす、然るべからず」とて、安楽房は追放されて、進士入道の真観房に、その後を書きつがせられたと述べている。正和元年（一三一二）ごろ舜昌のあらわした『法然

上人伝記』（九巻伝）の巻三の上にも、選択集製作のとき、安楽を執筆として要文をあつめたとき、「我もし翰墨にたえる身になからましかば、豈この仏法棟梁の役を勤めんや」と申したとき、「この僧、憍慢のこゝろふかくして悪道に堕つべし」とて、これを退けて進士入道真観をもつて執筆とせられけり云々」とある。安楽房遵西から真観房感西に執筆の交替があつた事情を述べている。

選択集の第一聖道浄土門章の末尾、私釈の問答のあとに浄土の師資相承をあげるところに、法然房源空の中国浄土教観がみられる。

道綽の『安楽集』と曇鸞の『往生論註』を引いて、難行道はすなわちこれ聖道門なり。易行道はすなはちこれ浄土門なり。難行・易行・聖道・浄土と、その言は異りといへども、その意はこれと同じ、天台・迦才これと同じ、まさに知るべしと。次に『西方要決』の文を引いて、その名は異つても、その意はまた同じであるから浄土宗の学者は先ずこの心を知るべきである。曇鸞・道綽が聖道から浄土に帰入した事実をあげて、「上古の賢哲なほかくの如し、末代の愚魯むしろこれに遵はざらんや」と結んでいる。草本ではこのあとに○の墨印をつけてその傍らに「可有師資相承、即在裏」と細字の註記があり、その紙背に細字をもつて浄土一宗の相承を問答体であげている。

問曰。聖道家諸宗、各有師資相承。……而今所言浄土宗有師資相承血脈譜乎。答曰。如聖道家血脈。浄土宗亦有血脈。但於浄土一宗諸家亦不同。所謂廬山慧遠法師、慈愍三蔵、道綽善導等是也。今且依道綽善導之一家。論師資相承血脈者。此亦有両説。

一者。菩提流支三蔵。慧寵法師。道場法師。曇鸞法師。大海禅師。法上法師。（已上出安楽集）

二者。菩提流支三蔵。曇鸞法師。道綽禅師。善導禅師。懐感法師。（小康）法師。（已上出唐宋両伝）

浄土宗の血脈相承の一説は、道綽禅師の『安楽集』の巻下、第四大門の六大徳をあげ、後説は唐道宣の『読高僧伝』と宋賛寧の『大宋高僧伝』によつて菩提流支以下六師をあげて浄土一宗の相承をたてている。このことは一応矛盾はないが、偏依善導を標榜する法然上人の立場で、善導の伝記を唐の高僧伝に典拠を求めることである。道宣の『続高僧伝』には善導の専伝はなく、僅かに巻二十七の遺身篇の唐終南豹林谷沙門釈会通伝に、山僧善導の伝記を付載するのみである。

選択集の浄土宗の血脈相承譜は、菩提流支を加えて六祖説をあげながら浄土五祖像との関係を言及していない。安楽房遵西が草本の紙背に、浄土宗の血脈相承を書くことが、浄土五祖説の成立よりも古く、その源始の形態を示して、これが俊乗房重源と法然上人との関係から将来浄土五祖図の説話へと進化するのでないかと思う。

四

法然上人の在世中、日宋交通も次第に頻繁となりつつあつたが、大陸浄土教に関する文献や資料も乏しく、選択集の製作にあたつてこれに参画した善慧房証空、真観房感西、安楽房遵西ら上人側近の弟子たちは、偏依善導の史料採集に大へん苦心を重ねたようである。浄土一宗の血脉についても、諸家不同であるとし、いわゆる廬山慧遠法師と慈愍三蔵と道綽善導などの三流をあげながら、たゞ、道綽善導の一流のみを掲げて、東晉の慧遠や唐の慈愍三蔵慧日の浄土教思想やその伝灯については全く言及していない。中国の浄土教について、三流の分立を認めながらその取捨廃立の思想的根拠を指摘していない。『選択集』巻下の第十六名号付属章のところにも

問曰。浄土祖師其数又多。謂弘法寺迦才、慈愍三蔵等是也。何不依彼等諸師。唯用善導一師哉。答曰。此等諸師雖宗浄土。未発三昧。善導和尚是三昧発得之人也。於道既有其証故且用之。

とある。中国における浄土教の諸師として唐の弘法寺迦才や慈愍三蔵慧日をあげながらただ善導が念仏三昧の獲得者である点を強調して偏依善導の理由としている。

第十三章の念仏多善根章には、竜舒居士王日休の『浄土文』巻一の文を引いて隋陳仁稜の襄陽石刻阿弥陀経の文をかゝげるが、その巻五の唐京師僧善導の伝記にはふれていない。念仏三昧を獲得した善導の事蹟としては、王古の『新修往生伝』に収める善導伝の三選の文をもつてその論旨をすゝめている。「ここに知る、善導和尚が行は、三昧を発して、力は師の位を導き、解行は凡倫にあらざることまさに暁かなり。また時の人の諺に「仏法東流してよりこのかた、禅師のごとく盛徳なるものあらず。絶倫の誉、えて称すべからざるものか、しかのみならず録せし観経の文疏すこぶる霊瑞を感じ、しばしば聖化に預かる。すでに聖の冥加を蒙むりて然も経の科文を造る。世をあげて証定の疏と称し、人これを貴んで仏の経法の如し」と述べて、偏依善導の立場を強調している。法然上人の膝下には、中国浄土教に関する文献や資料はあまり充分ではなかつた。乏しい参考文献を駆使して真名文の撰択集を製作することは大きな努力であつた。

『西方指南抄』巻上の本末には、法然上人御説法の事があり、これに仏身の事と三部経の事が収めてある。そのなかに浄土宗の師資相承を述べて、「しかるに、浄土宗に師資相承、血脈次第あり。いはく、菩提流支三蔵・恵寵法師・道場法師・曇鸞法師・法上法師・道綽禅師・善導禅師・懐感禅師・小康法師等なり。菩提流支より法上にいたるまでは、道綽の『安楽集』にいだせり。自他宗の人師、すでに浄土一宗となづけたり。浄土宗の祖師、また次第に相承せり。これによりて、いま相伝して浄土宗となづくるものなり。しかるを、こ

のむねをしらざるともがらは、むかしよりいまだ、八宗のほかに浄土宗といふことをきかずと難破することも候へば、いさゝかまふしひらき候なり」とある、浄土五祖の影像については、「次に往生浄土の祖師の五の影像を図絵したまふに、おほくこゝろあり。まづ恩徳を報ぜむがため、次に賢をみては、ひとしからむことをおふゆへなり。」として（乃至）「しかればいま浄土をねがはむ人、その宗の祖師をまなぶべきなり。しかるに浄土宗の師資相承に二の説あり。『安楽集』のごときは、菩提流支・恵寵法師・道場法師・曇鸞法師・斉朝法上法師等の六祖をいだせり。今また五祖といふは、曇鸞法師・道綽禅師・善導禅師・懐感禅師・小康法師等なり。」と述べそのあとに五祖の事蹟をかなりくわしく記録してある。

『西方指南抄』に収める法然上人説法の事は、その年時を詳にしない。選択集の記事と類似出没があるから建久年間から承元の法難までの聴記であらう。そのなかに、「ちかごろ唐よりわたりたる『竜舒浄土文』とまふす文候。それに阿弥陀経の脱文とまふして廿一字ある文をいだせり云々」とあるところは、選択集第十三章にみるところである。「今また五祖といふは、曇鸞法師・道綽禅師・善導禅師・懐感禅師・小康法師等なり」として浄土五祖の伝記を詳細に述べるところは選択集には認められない新しい点である。法然上人の説法の進展を物語るものである。

五

それ速やかに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中にしばらく聖道門をさしおきて選んで浄土門に入れ、浄土門に入らんと欲せば、正雑二門の中に、しばらく諸の雑行をなげうつて選んで正行に帰すべし。正行を修せんと欲せば、正助二業の中に、なお助業を傍らにして選んで正定を専らにすべし。正定の業とは、すなわち仏名を称するものなり。称名は必らず生ずることを得、仏の本願によるが故に」と、これが選択集の結論である。法然房源空は中国浄土教諸家のなかから唐の善導教学を指南として往生浄土の実践行儀の上に取捨廃立を明示して『選択本願念仏集』を著述したのである。したがつてこゝに廃捨した中国浄土教諸家の教説については、その理由を詳かにしていない。その究明と検討は、法然門下に課せられた研究課題である。

ことに鎌倉時代における日宋交通の進展にともなつて、新しく渡来する中国浄土教の典籍が法然門下の長西・幸西・隆寛・親鸞らによつて研究がすゝめられ、宋代文化に対する積極的な進取の態度から日本の浄土教学の躍進となるのである。法然房源空によつて提示された幾多の問題は、八百年後の今日でも、なお新しい中国浄土教研究の課題である。

（一九七一・七・一一稿）